【資料紹介】

昭和2(1927)年、大東文化学院の筑波山遠足
―「善く学ぶものは善く游ぶ」―

宮瀧　交二

はじめに

大正12(1923)年に設立され、その翌年から第1期生を迎えて漢学教育が開始された大東文化学院であるが、この当時の学生生活を窺うことが出来る資料は決して多くはない。そのような中、今からちょうど90年前の昭和2(1927)年7月1日に発行された(財)斯文会の『斯文』第9編第7号の61～62頁に、「彙報」として「大東文化学院生徒の遠足」という短い記事が掲載されている[1]。小稿では、当該記事により、大東文化学院の設立から僅かに4年後の学生生活の一齣を垣間見てみたい。

1．筑波山頂での聯句会

(財)斯文会は、明治13(1880)年に東洋の学術文化の交流を意図した、時の太政大臣・岩倉具視[いわくら・ともみ：文政8(1825)年～明治16(1883)年]が、西南戦争で活躍した軍人・谷干城[たに・たてき：天保8(1837)年～明治44(1911)年]らとはかって創設した斯文学会が母体であり、大正7(1918)年に公益財団法人となった後、現在も東京・湯島聖堂内に事務局が置かれて活動を続けている学術団体である。その設立の趣意が大東文化学院のそれと軌を一にするところから、おそらく大東文化学院の教職員には、(財)斯文会の会員も少なくなかったものと思われる。

さて、「大東文化学院生徒の遠足」は短文なので、ここに再掲してみたい(人名以外の旧漢字は新漢字に改めた。また、読み下し文は筆者の加筆である)。

○大東文化学院生徒の遠足

天地の大徳之を生と云ひ、生々之を易と云ふ。人の一生は天地に則り活動に終始す。偸安姑息は固より男児の本領に非ず。読書可なり、思索可なり、運動亦可なり。語に云ふ、善く学ぶものは善く游ぶと。若し夫れ名山に遊び、大水を渉り、天地の大文章を観て、浩然の英気を養ふ、豈人生の志事に非ずや。大儒朱文公は酔うて祝融峯を下り、陽明先生は海に游びて、飛錫天風に下るの吟あり。後学の徒何ぞその流風余韻を追はざらん。況や薫風四郊に遍く、新緑乾坤に満つ。満目の生気、吾人の一游を促がすこと頻なり。是に於て六月四日を卜し、大東文化学院生徒数十人筑波登山の快挙を試む。節山博士旅行部長として之に加はり英姿颯爽、壮者に伍して山頂を極め峰頭の石に踞して天下を小とし、豪懐禁じ難く、大に生徒を藤田小四郎の旧蹟なる依雲亭に会して柏梁体聯句を催し、一時の盛を極めたりと云ふ。

筑波山上聯句

日本男児意気剛	井場正人	日本の男児意気剛く、
蹈破嶮峯誇健強	竹下都雪	嶮峯を蹈破し健強を誇る。
振衣飄飄凌虚翔	近藤盍反子	衣を振ふこと飄飄とし虚を凌ぎて翔、
白雲深処之吾郷	田中天鐘	白雲深き処は之れ吾が郷なり。
秀峰突兀天一方	上野天人	秀峰突兀す天の一方、
深壑泉声是霊場	篠塚東皐	深壑の泉声は是れ霊場。
二神会降此石牀	根津素軒	二神会々此の石牀を降し、
男女二峯近相望	鈴木天城	男女の二峯相望むに近し。
夫婦相和保綱常	宮田城山	夫婦相和し綱常を保ち、
山中民俗出羲皇	上田圖南	山中の民俗は羲皇に出づ。
正是家家農事忙	多田羅桂堂	正に是れ家家は農事に忙しく、
桑柘村墟麦半黄	吉井秦岳	桑柘の村墟は麦半ば黄なり。
緑樹織成淡濃妝	井上千秋	緑樹は織成す淡濃の妝、
薔薇花開渓水傍	川又東岳	薔薇は花開く渓水の傍。

野逕猶見残蝶狂	永島本山	野逕に猶ほ見る残蝶の狂へるを、
六月流鶯啼山荘	國見昧山	六月の流鶯は山荘に啼く。
薫風一路橘花香	山口芙蓉	薫風の一路は橘花香り、
筑波嶺高躑躅芳	山田修文	筑波の嶺高く躑躅芳し。
観来天地大文章	藤井紫水	観来たる天地の大文章、
関東第一万人倡	大石春泉	関東の第一は万人倡う。
累石層巌道羊腸	岡田凡天	累石層巌道は羊腸、
筑峰一蹈意気昌	岩澤城東	筑峰一蹈し意気昌ん。
一嘯臨風俗慮忘	田久保春水	一嘯風に臨み俗慮忘れ、
白雲悠悠回山長	廣吉彩霞	白雲悠悠山を回りて長し。
遙望霞浦片帆張	石坂翠山	遙かに霞浦を望めば片帆張り、
山雨欲来覚清涼	河野孖川	山雨来たらんと欲して清涼を覚ゆ。
白竜挟雨黒水洋	矢島玄堂	白竜は雨を挟み黒水洋く、
倚厓長嘯傾大觴	眞保松典	厓に倚り長嘯し大觴を傾く。
神州正声誰発揚	和田十洲	神州の正声誰か発揚せん、
昭和男子清八郎	角田膽岳	昭和の男子清八郎。
要揚大東文化光	鹽谷節山	要ず掲げん大東文化の光を。

以上が記事の全文である。昭和初期の一般的な口語体ではなく漢文体の文語文で記されており、昭和2(1927)年6月4日に、大東文化学院の生徒数十人が筑波山に遠足し、登山後、依雲亭で聯句会を催したことが判明する興味深い記事である。特に、文末にその時に引率した教員と30人の学生が詠んだ聯句が掲載されている点は注目されるところであり、大東文化学院ならではの遠足記事となっている。

文中に登場する「節山先生」とは、聯句の最後を飾っている漢学者の塩谷節山[しおのや・せつざん＝本名・温(おん)：明治11(1878)年～昭和37(1962)年]である(写真1)。昭和2(1927)年当時、塩谷の本務校は東京帝国大学(教授)であった。しかしながら、この筑波山遠足が行われ

た昭和２年の前年にあたる、大正15(1926)年の大東文化学院本科第三学年の課程表には、

詩経　　教授・文博　　塩谷　温

と、塩谷の名が見えており、少なくとも筑波山遠足の前年には大東文化学院の教壇に立っていたようである[2]。この課程表には、塩谷の他にも大東文化学院の外に本務校を持っていた教員の名が認められるが、いずれも今日のように「非常勤講師」とは記されず、あくまでも「教授」としてその名が記されている点には注目しておきたい。そして、筑波山遠足が行われた昭和２年の「教師一覧表(イロハ順)」にも、当然のことながら、

写真１　塩谷節山先生
(『塩谷先生記念会誌』
昭和14年、より)

文学博士　塩 谷 温

と、その名が見えている[3]。ちなみに、この聯句の発句を担当している井場正人も、この「教師一覧表(イロハ順)」にその名が見えているが、前掲の大正15年の大東文化学院本科第三学年の課程表には登場していない。しかしながら、後述のように、第１期生を迎えた大正13(1924)年に誕生した教職員・学生の親睦会である同学会の特別会員に既にその名が見えており、大東文化学院設立当初からの教員であろう。いずれにしても、この聯句の出来を左右する発句と終句は、生徒を筑波山遠足に引率した大東文化学院の教員がこれを担当していたのである。

さて、設立当初の大東文化学院では、教員が学生を引率して校外に赴くことが盛んであったようであり、入学式の直後には明治神宮への参拝、そして、毎年６月初旬には２泊３日の伊勢神宮への参拝が行われていた[4]。そして、筑波山遠足の２年後である昭和４(1929)年に実施された伊勢神宮参拝の旅行記が遺されているが、ここでも、

(前略)

一同は総長の他、神宮司庁の官吏、旅館の案内人等に出迎へられて駅前の宇仁館に投宿す。総長大津淳一郎先生、伊勢路に入りて興趣湧くあり、詩を賦して示さる。

入勢州

昔時城府変遷中　　渓転峰回鉄路通
今古勢州多俊傑　　吾推准后北魄公
(中略)

神宮を拝して総長一詩あり。

拝皇神宮恭賦

域樹吹涼翠欲流　　神橋欲過乃低頭
五鑾川水淙淙浄　　一鳥無声万象幽
(後略)

と、昭和3(1928)年に大東文化学院第6代総長に着任した、貴族院勅撰議員・大津淳一郎[おおつ・じゅんいちろう：安政3(1857)年～昭和7(1932)年]が行く先々で率先して作詩していたことが記されている[5]。おそらく、設立当初の大東文化学院では、校外に赴いた際、教員が率先して作詩し、時には学生にも作詩させてこれを指導することが多かったのではないだろうか。昭和2年の筑波山遠足の際も、聯句の発句と終句を担当している塩谷温と井場正人がこれを先導したとみてよいであろう。

また、大東文化学院の教員と学生が旅に出る機会は、こうした遠足や神宮参拝といった校外学習の枠にとどまっていなかったようである。第1期生を迎えた大正13(1924)年には、「会員の心身を修練し節義を磨励し会員相互の親睦を図る」目的を以って「同学会」が結成され、学芸部・弁論部・運動部・旅行部の四部が置かれている。大正15(1926)年には役員の顔ぶれが以下のように変わっており、ここに、昭和2(1927)年の筑波山遠足で学生を引率した2名の教員の名があることは注目に値する[6]。

会　長　市村 瓚次郎　　弁論部長　大 峡 秀 栄

副会長　塩谷　温　　運動部長　塩谷　温
主　事　井場　正人　　旅行部長　塩谷　温

塩谷温(節山)は同学会の副会長兼運動部長・旅行部長であり、井場正人は同学会の主事を務めている。「大東文化学院生徒の遠足」の文中に「節山博士旅行部長として之に加はり」とあることからすれば、この昭和２年の筑波山遠足は、同学会旅行部が企画し、塩谷温・井場正人両教員が引率したものだったのではないだろうか。なお、文中に登場する「依雲亭」の明治末～大正初期のものと思われる絵葉書を入手することが出来たので、掲げておきたい(写真２)。

写真２　依雲亭

２．校外学習としての遠足

管見によれば、日本近代の学校における遠足や修学旅行といった校外学習の歴史やその由来については、日本教育史の中でもあまり手が付けられていない課題のようである。こうした校外学習が学校行事として採用された淵源には、17 世紀末から 18 世紀にかけてイギリスで良家の子

弟の教育の一環として行われたヨーロッパ大陸旅行であるグランドツアーがあるようにも思われるが、その検討については他日を期したい。

そのような中、明治期の遠足・運動会・修学旅行を検討した浜野兼一氏によれば、「明治期における遠足・運動会・修学旅行に関する規定をみてみると、遠足と運動会については、いわゆる法制規定が定められていない」とのことであり、修学旅行のみが明治21(1888)年の「尋常師範学校準則」に定められ、「文部省による唯一の法制規定」となっていたという。こうしたことから、遠足・運動会・修学旅行は、徐々に諸法令や学校の諸規定・内規に盛り込まれ、「明治末期から大正期にかけて高等女学校に遠足・運動会・修学旅行が普及」していったとみられている[7]。

また、筆者はかつて、東京美術学校(現・東京芸術大学)の初代校長を務めた美術教育者・岡倉天心[おかくら・てんしん：文久2(1863)年～大正2(1913)年]の日本博物館史への位置付けを試みたことがあるが、天心は明治23(1890)年の校長就任以来、同校の教員の中に奈良・京都を訪れたことのない者が少なくないことから、彼らを積極的に奈良・京都に出張させていたようである。また、明治29(1896)年からは、学生たちの奈良・京都への古美術見学旅行を東京美術学校の正規の行事として実施しており、天心は高等教育における校外学習の重要性を逸早く認識していたと述べても過言ではない[8]。

いずれにしても、明治期以来のこうした試行錯誤を通じて、遠足や修学旅行といった校外学習は、徐々に学校行事として各地の学校において定着していったとみてよいであろう。

このように、大東文化学院が設立された大正時代末には、既に多くの学校、特に高等教育の現場で、遠足や修学旅行が実施されていたものと思われる。そのような中、大東文化学院でも設立の当初から前掲のように明治神宮や伊勢神宮への参拝、そして同学会における旅行部の設立など、独自の校外学習が積極的に導入され、教員が学生を引率して各所に赴いていたのである。

3．大正・昭和初期の行楽と筑波山

最後に、当該期の筑波山遠足の実際について確認しておきたい。一般に大正期の社会は、明治期以来の「殖産興業」「富国強兵」政策の下で進められてきた諸工業の発展が経済的な基盤となり、高等教育機関の拡充や、新聞・雑誌・ラジオ等のマスメディアの発達等もあって、各地で都市化が急速に進み、増加した一般勤労者(大衆)を担い手とする大衆文化が発展したと評価されている。都市とその近郊では、鉄道とバスを中心とした交通網も急速に整備されて、日帰りまたは1泊の行楽が市民生活に定着した時期でもあった。そのため、自由日記等の販売で広く知られる博文館が、小説家・田山花袋[たやま・かたい：明治5(1872)年～昭和5(1930)年]を執筆者に起用して旅行案内書を複数種刊行して好評を博したように、全国各地を対象とした様々な旅行案内書が、この時期に数多く刊行されている。

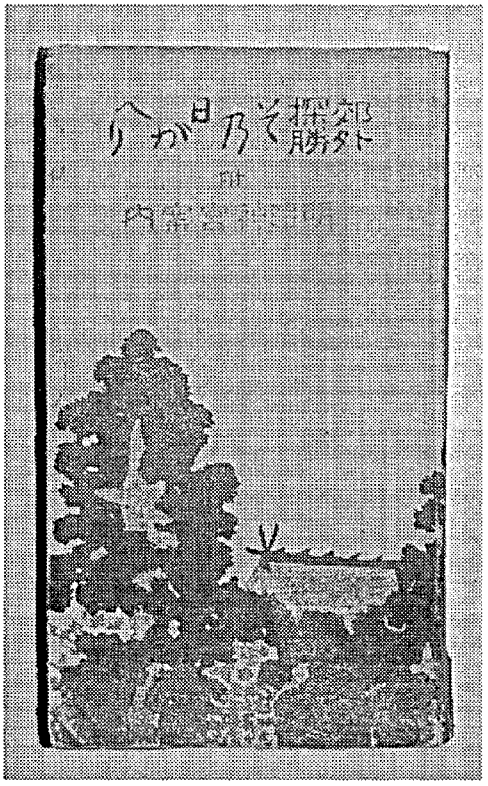
今、筆者の手許にあるのは、大正5(1916)年に落合浪雄が著した旅行案内書『郊外探勝　そ乃日がへり　附明治神宮案内[9]』であるが(資料3)、ここにはこの当時の関東地方各地の行楽地が、以下のように行楽の目的別の項に分類されて掲載されている。例えば、花卉や草木の観賞地としては、

うめ、きく、さくら、桜草、しやうぶ、つゝじ、ふぢ、もみぢ、もゝ、もものはな、わかば

の11項が掲げられており、寺社参詣地は、

おまゐり、さんけい、七福神詣

の3項に分けられている。そして、これ以外の行楽地としては、



資料3
『郊外探勝　そ乃日がへり』

あゆりやう(あゆがり)、温泉、遠足(ゑんそく)、海水浴、川魚釣、
さんぽ、スケート、すゞみ、たうぢ、たんけん、つきみ、つみくさ、
ほたる、遊園地、ゆさん

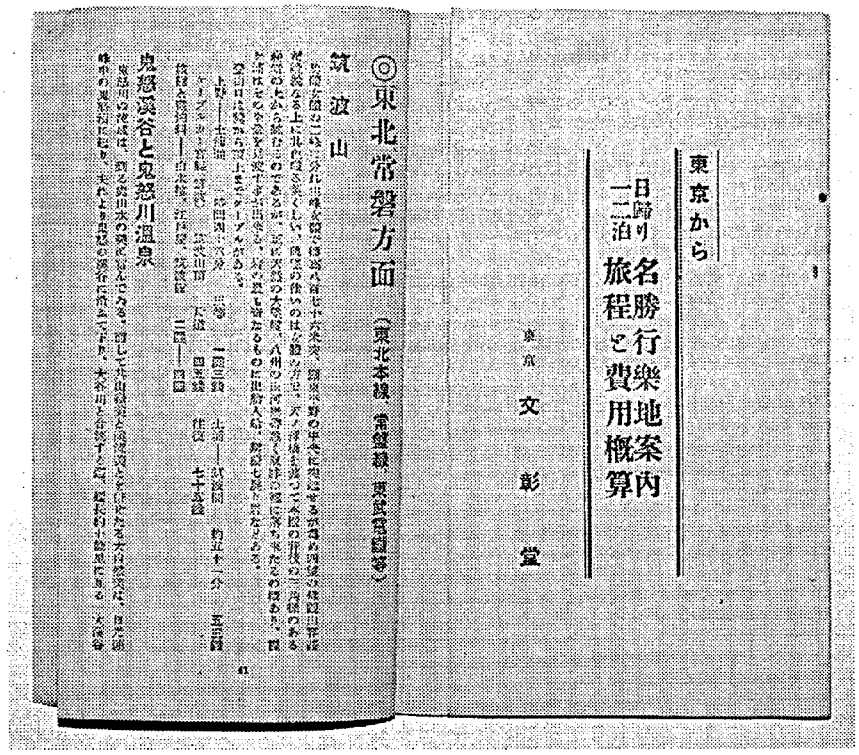
の15項が掲げられている。この中に「遠足(ゑんそく)」があることは注目に値し、既にこの旅行案内書が刊行された大正5年には、「遠足」の語が広く市民権を得ていたことが窺われるのである。そして、「遠足(ゑんそく)」の項に挙がっている場所は、

荒幡、深大寺、筑波山、飯能、百穴、富士登山

の6ヵ所であり、関東地方にあっては、筑波山が富士山と並ぶ登山遠足地であったことが判明する。

また、架蔵の昭和9(1934)年に刊行された『東京から　日帰り一二泊　名勝行楽地案内　旅程と費用概算[10]』は、『東京中心日帰り一二泊(ハイキング　ピクニック)旅行図』の附録であるが(資料4)、以下のような記事が載せられている。

◎東北、常磐方面　(東北本線、常磐線、東武電鉄等)


東京から
日帰り一二泊
名勝行楽地案内
旅程と費用概算
東京　文彰堂

◎東北常磐方面　(東北本線　常磐線　東武電鉄等)

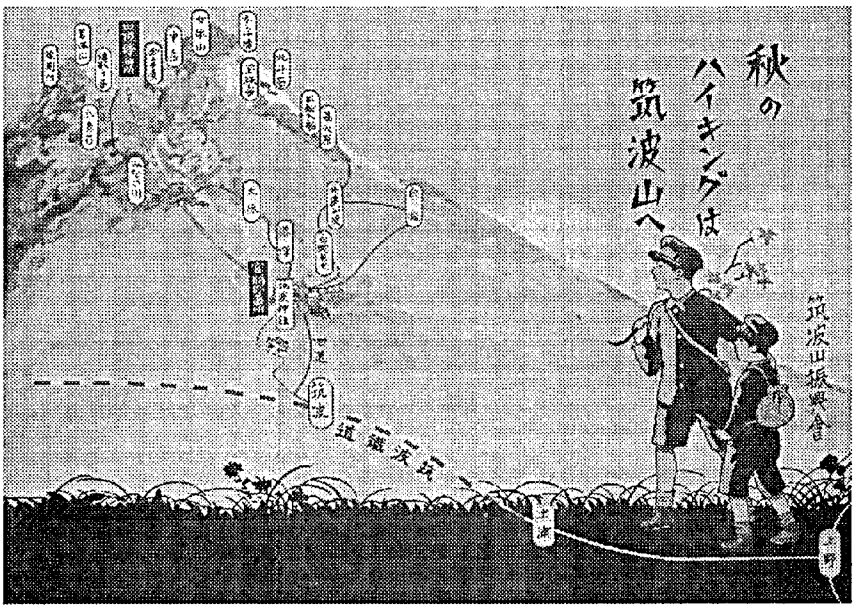
筑波山

鬼怒渓谷と鬼怒川温泉

資料4　『東京から　日帰り一二泊　名勝行楽地案内　旅程と費用概算』

筑波山

男体女体の二峰に分れ主峰女体で標高八百七十六米突、関東平野の中央に突起せるが為め四望の偉観山容甚だ峻鋭なる上に其色頗る美くしい、眺望の佳いのは女体の方で、天ノ浮橋を渡つて本殿の背後の三角標のある嶄岩の上から眺むるのであるが、正に天然の大望楼、八州の山河襟帯悉く双眸の裡に落ち来たるの概あり。霞ヶ浦はその全景を見渡す事が出来る、岩の最も奇なるものに出船入船、弁慶七戻り岩などある。



資料５（上）『秋のハイキングは筑波山へ』　資料６（下）　同裏

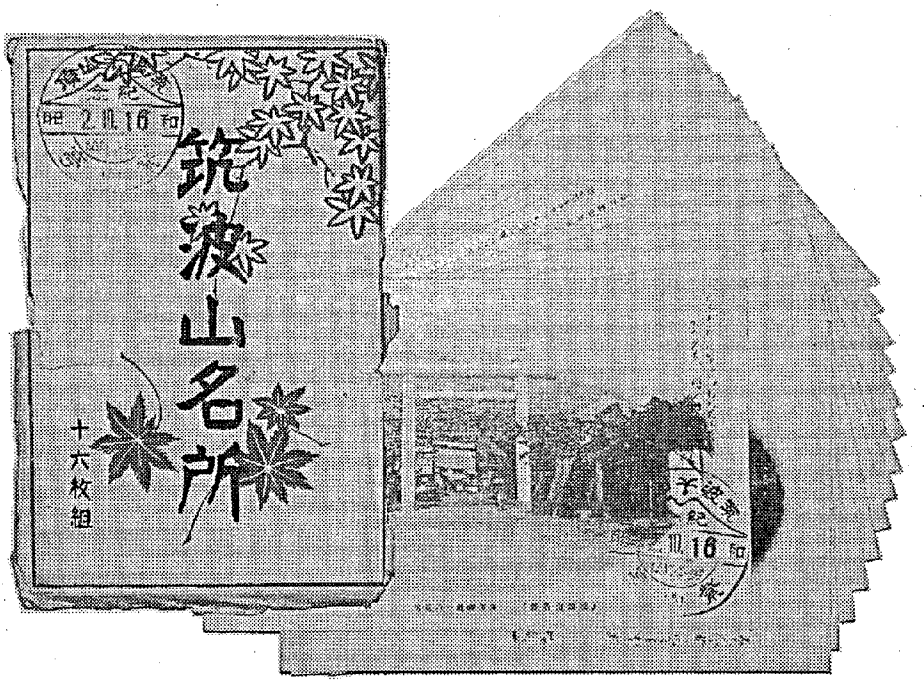
登山口は麓から頂上までケーブルがある。

上野－土浦間　一時間四十六分　三等　一円三銭　土浦－筑波間　約五十一分　五三銭　ケーブルカー宮脇(筑波)　筑波山頂　片道　四五銭　往復　七十五銭

旅館と宿泊料－山水楼、江戸屋、筑波館　二円－四円

この記述によれば、昭和９年当時、上野駅から筑波駅までは土浦駅乗り換えで２時間37分、料金は併せて１円56銭であったことが判明する。

更に、架蔵の旅行パンフレット『秋のハイキングは筑波山へ[11]』は、発行年は不明であるが、横書き部分が右側から記されているので戦前のものであり、カラー印刷で紙質も良いことから、『東京から　日帰り一二泊　名勝行楽地案内　旅程と費用概算』と同じ昭和初期の制作と思われる(資料５・６)。ここには、９月23・24日と10月７日～11月４日までの日曜祭日に限り、上野・筑波間に直通列車を運行することが記されており、その所要時間は２時間７分前後、運賃も往復で２円均一となっている。日帰りの行楽客を当て込んだパンフレットであり、それだけ日帰りで筑波山に登山する行楽客が多かったということにもなるであろ



資料７　絵葉書「筑波山名所」

う。ただし、直通列車が運行されない月～土曜日には、土浦駅で乗り換えとなり、その所要時間は「二時間半」、運賃も「三等往復　二円六十銭」とあるので、前掲書に記載されたデータにほぼ等しいものとなっている。

昭和２(1927)年の大東文化学院の筑波山遠足も日帰りで催行されたようであり、おそらくここに掲げた旅行案内書・パンフレットに記されたような旅程で実施されたのではないだろうか。なお最後に、この大東文化学院の筑波山遠足と同年の昭和２年10月16日のスタンプ(印影は「筑波山頂／記念／昭２．10．16和／男体山／紫山亭」)が、たとう袋に押印された「筑波山名所」と題する観光絵葉書セットがあるので、御覧いただければ幸いである(資料７)。

まとめにかえて

筆者は、本年度まで文学部英米文学科に所属しており、ゼミナールも担当している。ゼミナールでは、５年前から、明治11(1878)年に来日したイギリス人女性、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』(Isabella. L. Bird *Unbeaten Tracks in Japan*)を学生と一緒に精読しているが、毎年夏のゼミ合宿では、実際にイザベラ・バードが訪れた土地を訪ねている。平成26(2014)年の夏には、バードが「桃源郷」と記した山形県金山町を訪ねたが、その際、学生たちの提案で最上川のライン下りを楽しむ機会にも恵まれ、舟上では芭蕉に負けじと全員で句会を催したという楽しい思い出がある。その87年前になるが、学生とともに筑波山に赴き聯句会を催した塩谷温・井場正人両教員もまた、束の間の至福の時を過ごしたのではないだろうか。

なお、小稿の執筆に際し、資料の収集に関しては本学東松山60周年記念図書館の坪野広氏、埼玉県立歴史と民俗の博物館の水口由紀子氏のお手を煩わし、漢詩の読み下しに関しては本学中国文学科の中林史朗教授に御教示を仰ぐことが出来た。また、英文サマリーの作成に関しては、本学英米文学科の照沼阿貴子准教授、国際関係学科のギャレン・ムロイ

准教授にお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。

---

[1] 国立国会図書館デジタルコレクション（請求記号：Z8-316、書誌 ID：10351）。大東文化大学板橋図書館（板橋書庫棟２階書庫 A［O·P］、請求記号：MA//510/9、資料番号：1190203405）。

[2] 「第二編　第一章　第二節　（二）学科課程」大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会『大東文化大学五十年史』学校法人大東文化学園、1973 年。

[3] 「第二編　第一章　第二節　（三）学則・入学要覧・服制 本院概況 「教師一覧表（イロハ順）」（昭和二年十月現在）」大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会『大東文化大学五十年史』学校法人大東文化学園、1973 年。

[4] 「第二編　第一章　第二節　（五）伊勢神宮参拝」大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会『大東文化大学五十年史』学校法人大東文化学園、1973 年。

[5] 註[4]に同じ。

[6] 「第二編　第一章　第四節　（一）学生会の活動」大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会『大東文化大学五十年史』学校法人大東文化学園、1973 年。

[7] 浜野兼一「明治期における高等女学校の教科外教育活動に関する一考察－高等女学校関係法令、学校諸規定からみた遠足・運動会・修学旅行の成立過程について－」『アジア文化研究』13、2006 年。

[8] 拙稿「第二章　日本博物館学史の中の岡倉天心」（岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二『岡倉天心　思想と行動』吉川弘文館、2013 年。

[9] 落合浪雄『郊外探勝　そ乃日がへり　附明治神宮案内』金尾文淵堂、1916 年。

[10] 『東京から　日帰り一二泊　名勝行楽地案内　旅程と費用概算』文彰堂、1934 年。

[11] 筑波山振興会『秋のハイキングは筑波山へ』（発行年不明）。

An excursion to Mt. Tsukuba conducted by Daito Bunka Gakuin in the second year of the Showa period (1927) - Those who study hard play hard -

Koji Miyataki

According to records, dozens of Daito Bunka Gakuin students made an excursion to Mt. Tsukuba and held a linked-verse poetry party on June 4th in the second year of Showa (1927), shortly after the school was founded in the 12th year of Taisho (1923). In those early days, teachers at Daito Bunka Gakuin often took the students out of school. It was typical of the students at Daito Bunka Gakuin, which was founded to advance the study of the Chinese classics, to not only climb Mt. Tsukuba but also hold a party where they enjoyed composing linked Chinese poems. This excursion was made against the background of the development of railways and bus lines in the metropolitan area during the short-lived prosperous period before the global economic crisis on the one hand and a growing popularity of one-day or overnight excursions on the other.